

### きものでもっと喜びを

## 吉澤織物 (十日町市) ■ 2 ■

### 時代にともな にいがた企業 Niigata ヒストリー

から名付けられ、戦後復興期のムードに乗って爆発的な人気を呼んだ。62年には産地全体で74億円を売り上げた。しかし、吉澤織物はマジヨリ力お召を手掛けられなかった。「会社が小規模で、設備や人がなかったから」と吉澤織物会長の吉澤慎一氏(87)は明かす。

戦後、また小規模産地にすぎなかった十日町市の織物業を大きく飛躍させたのは、1959年に登場した「マジヨリ力お召」というヒット商品だ。染めた糸を織り上げて柄を出す「先染め」ながら、豪華な多色使いを可能にした画期的な織物だった。イタリヤ産のカラフルな陶器のイメージ

## 産地救うロングセラーに



若山恭庸さんと開発した黒羽織を手にする吉澤慎一会長。「おまえがしくじったおかげで黒羽織ができたって、今でも若山さん笑いながら話している」と言う十日町市

フームを横目に、吉澤織物も導入した。は地道な商品開発に励んだ。その一つが「色絵羽織」だ。色絵羽織には、染めた糸で織り上げた「先染め」と、白生地で作った羽織に後から色を付ける「後染め」がある。元々、そのまま染めると縦に1本、白生地のちりめん給羽織を手掛けていた吉澤織物は、後染めを採用。他の産地の品を一つで、縦糸を整える「整理参考」に、ピンクとブルーの商標を当時担当していた元取締役品を売り出していた。「これはまったく弱った」。

「これは規模が小さいから、あらかじめそうたくさん用意できない。そのつど、お客様の注文に合わせて、ピンクかブルーに色を付けた」と慎一氏は説明する。母親の急逝を機に、新時代への一念発起の思いで61年に十日町市昭和町に工場を新設。羽織に柄を入れる、より高性能のジャガード(柄織機)を持ちこたえて語ると、

「1年ほどすると他社も次々と黒羽織に参入した。マジヨリ力フームが過当競争によって短期間で終わり、危機に陥っていた十日町産地を救う人気が商品となった。大型の機械で大量に黒羽織を生産する会社も現れ、ピーク時には生産量が年間110万着を超えた。生産は20年間にわたって続き、産地に累計1800億円の売り上げをもたらした。しかし、まだフームの熱が残る中、吉澤織物は黒羽織から手を引く、生き残りを懸け、次なる挑戦にかじを切ったのだ。

# 黒羽織開発大ヒット

十日町市内の小学校の昭和40年代の入学式。黒羽織を着た母親の姿が目立つ(十日町市博物館提供)



「仲の良かった新宿の伊勢丹の担当者が『慎ちゃん、これは売れるよ!』って。慎一氏は思い返す。当初は新宿伊勢丹だけの販売だったが、右から左へ飛ぶように売れた。織機はフル回転。社員は残業を増やし、外注の出機も増やして対応した。人気の裏には「運もあった」と慎一氏。吉澤織物は布の表面に図柄をふっくらと立体的に浮かび上がらせる「ふくれ織り」の手法をたまたま採用していた。おかげで、フイルムで覆った光沢のある糸を使って織った柄は黒色の羽織の上にはっきりときれいに浮き出た。

### きものでもっと喜びを

## 吉澤織物 (十日町市) ■ 1 ■

### 時代にともな にいがた企業 Niigata ヒストリー

古くからの織物産地として知られる十日町。年間を通じて風が少なく湿度が高い盆地特有の気象条件が、織物を扱うのに適していたといわれる。さらに豪雪地にとって織物は、戸外で農作業ができない冬場に最適ななりわいでも

「Joyful More」。日本の伝統文化の着物で、人生を豊かに彩ってほしい。そんな思いを企業理念に掲げる十日町市の着物製造業「吉澤織物」が今年、創業125年となる。浮き沈みの激しい織物業界で、新しいものを追い求めつつ、守り育てた伝統や技術を次世代に受け継ごうとしている。「不易

## 大火や戦争 越えて会社化



1966年に建設された吉澤織物の本社社屋=十日町市本町1

あった。吉澤織物は、吉澤家5代目の貞治が1897年、当時流行していた「明石ちぢみ」を手掛けて、「吉澤機工場」を立ち上げたのが始まりとされ、1880年代には、地域にちぢみ織の製造工場が立ち上がり、町人ながら幕府から帯刀も織物とはゆかりが深かったも許された。ようだと、7代目で現会長の吉澤慎一氏(87)は話す。歴史の中で、婿養子だった3代目の与市はひとかど迎えた。ただ、東北の飢饉などの人物だった。元々は十日町による原糸の高騰に加え、町の織物問屋の大番頭で、縮

会社データ

創業	1897年
会社設立	1950年
資本金	5000万円
事業内容	絹織物(着物)のネフ加工 製造と販売。スカートなどのプリント
従業員数	70人

「明石ちぢみの5代目。6代目はオールシーズン着られる商品の開発。挑戦によって今の吉澤がある」と、現社長の吉澤武彦氏(57)は足跡を語る。そして7代目を継いだ慎一氏は、専務時代に人気商品を開発する。それは、ある失敗から生まれた。産地が回復基調にある中、吉澤機工場は50年、「吉澤織物株式会社」に改組。6代目武治が社長に就任した。

が制限され、江戸後期に急速に衰退した。代わって全国で養蚕業が広まり、十日町でも「麻から絹へ」の大転換が図られた。明治を迎えて技術は高度化し、工場生産へと移行。その看板商品となったのが明石ちぢみだ。強み。高い技術を掛けた細い糸を使う高度な技術により、生地を生まれる「シボ」と呼ばれる凹凸がさらりとした感触を生む。明石ちぢみは「蟬の翅」と呼ばれ、高級夏織物として好評を博す。濡れると縮みやすい欠点も、「蒸熱加工」という技術で克服した。明石ちぢみの発展と共に礎を築いた吉澤機工場だが、当初は苦境が続いた。創業翌年の98年に貞治が軍に召される。1900年6月には市街地の8割を焼いたという十日町大火に見舞われ、機工場も焼失した。町は懸命の努力で復活し、同社も貞治と父・虎吉が力を

# 明石ちぢみで礎築く

の「見分方」という販売仕入れの総括責任者のような立場だったと伝わる。

37年に日中戦争が勃発した後は軍需景気で産地も潤った。しかし、戦況が激しくなると、絹織物は厳しい統制を受ける。吉澤機工場も鉄製の織機類の供出を求められ成長した。

### きものでもっと喜びを 吉澤織物 (十日町市) ■ 4 ■

82年には「十日町紉」と「十日町明石ちぢみ」が国の伝統



かつて十日町市や周辺地域では、農閑期の冬の副業として機を織り、品物を織物業者に納める「出機」を手掛ける家が多くあった。「織り」を祖業とする吉澤織物(十日町市)も、外部の職人に支えられてきた。

# 織りの技 社内で継承

## ブランド新設 工程も整備



七代目吉澤与市の作品「極み」。織りの紬に染め、絞り、刺繍、箔と、着物の技術が凝縮されている

的工芸品に指定されたが、手ごう。7代目の慎一氏は社掛けられる職人は最盛期から大きく減っていた。伝統の危機は十日町に限らず、全国的に広がっていた。吉澤織物の現会長、ていた明石ちぢみもほそ吉澤慎一氏(87)は、織物業ながら復活させた。協同組合の活動を全国を巡る中で技術継承に悩む産地のさ

社内で織りの技術を受け継ぐ。新たなブランドでは、慎一氏が自ら振り返る。努力を重ね、吉澤織物は96年に十日町明石ちぢみで全国伝統的工芸品展の最高賞である通産大臣賞を受賞。2007年には、七代目吉澤与市ブランドの自信作「極み」を完成させた。

指導者はいない。全国の産地の職人を訪ねた。「箔を付ける」とき、ご飯をつぶしてのりをする。上田(長野県)で見ると盗んだ。慎一氏は笑いながら振り返る。努力を重ね、吉澤織物は96年に十日町明石ちぢみで全国伝統的工芸品展の最高賞である通産大臣賞を受賞。2007年には、七代目吉澤与市ブランドの自信作「極み」を完成させた。



十日町明石ちぢみの織りの作業。強い糸をかけた細い糸を使い、高度な技術で織り上げる

研修先は、織りの全工程を手掛ける市内でもまれな工房だった。「たくさん迷惑を掛け、しかられながら織物を一から学んだ」。その経験が財産となった。吉澤織物に戻ると「織りの工程全てを社内に整えよ」と慎一氏の指令が下った。工程の多い織りの着物は、社外の職人に頼る部分が多くなる。高齢化で外注先が細いことを見越し、先手を打つ

### きものでもっと喜びを 吉澤織物 (十日町市) ■ 3 ■

「大丈夫。この方向で間違いない。1964年の東京五輪表彰式。テレビに映るコンパニオンの振り袖姿を見つめ、吉澤織物専務(現会長の吉澤慎一氏)は確信していた。前年、十日町織物工業協同組合は、100億円産地を目指す「100作戦」を打ち出した。明石ちぢみに代表される「織り」で発展してきた



産地に、友禅の「染め」の技術を導入し、「着物の総合産地」を目指すのが柱だった。当時、友禅染は京都の独壇場。ゼロからの出発は問屋など取引先から無謀だとも指摘された。だが、染めた糸を織って柄を出す「先染め」は下降傾向をたどり、時代が華やかな着物を求めているのは明らかだった。

## 「手描き」で工場一貫生産



産地一斉の春物新作発表会で取引先と振り袖の商談に臨む吉澤織物の社員ら=2021年9月、十日町市

に黒い染料が染み込んだり、のりが割れて柄の部分に黒色が目指そうと、みんな懸命だ。だが、のりの輪郭より内側に黒い染料が染み込んだり、のりが割れて柄の部分に黒色が目指そうと、みんな懸命だ。だが、のりの輪郭より内側に黒い染料が染み込んだり、のりが割れて柄の部分に黒色が目指そうと、みんな懸命だ。

組合を中心に、「染め」の着物を生かしたイベントも次々と登場した。戦後の織物業復興期に始まった「雪まつり」では、着物ショーが華やかさを増し、82年からは、ミスコンテストでも話題を集めた。全国の関係者が集う「きものサミット」や、街なかでの「きものまつり」をはじめ、多様な取り組みが十日町の名を高めた。一方で、生活様式の変化と、オイルショック後の構造的な不況もあり、着物離れは徐々に進む。そして伝統の「織り」の現場では、静かな危機が進行していた。

# 友禅染 ゼロから挑戦

十日町産地は、職人による分業体制の京都に対し、工場一貫生産による染めの技法の開発を目指した。産地の決断に吉澤織物も呼応した。65年、黒羽織ブームの裏側で、友禅染への挑戦を開始した。

筆を使って生地の色をのせる手描き友禅の作業。吉澤織物は手まりや扇、花、鶴亀などの古典柄を得意とする



筆を使って生地の色をのせる手描き友禅の作業。吉澤織物は手まりや扇、花、鶴亀などの古典柄を得意とする

# 産地の未来育てたい

昨年11月下旬、十日町市にある吉澤織物の昭和町工場に、市立西小学校の3年生40人が訪れた。友禅染の柄を覆うのりを洗って落とす「水洗」や、明石ちぢみの織りなど、着物の製造工程を約1時間かけて見学した。

型友禅の作業場では、手際よく色を入れていく職人の動きに視線が集まった。「一反

## 吉澤織物 (十日町市)

### きものでもっと喜びを

時代にともに  
にいがた 企業  
Niigata ヒストリー

を作るのに300枚から400枚の型を使い、1週間から10日必要です。工場長の村山義人氏(61)の説明に「えいっ」と驚きの声が上がった。古里が誇る着物製造の技術に小さいころから触れてもらおうと、吉澤織物では1980年代から、主に市内の小学校を対象に見学を受け入れてきた。

## 「不易流行」を創作理念に



地元の児童の見学を受け入れる吉澤織物の工場。着物製造の各工程のほか、十日町産地の特徴なども説明する＝2021年11月、十日町市

「多い年は年間20件近くは地」の「未来」を育てる。もなった。当初からの担当者、元取締役工場長の若山恭唐氏(77)は記憶をたどる。社から向き合ってきた。

産地の売り上げは76年の581億円をピークに、10分の1以下にまで縮小した。関係者数も同じく最盛期の1割を切った。そうした中で、地域舞踊吾妻流宗家の初代・吾妻の伝統に触れた子どもたちの記憶が何らかの形で実を結び、日がくるかもしれないと、産組で、美しい衣装の着物がず

「吾妻さんの生き方や芸術観に触れることで、我々も多くのことを学んだ」と慎一氏は言う。人に学び、自身の感性を高め、それをものづくりに生かす。「人づくりこそ原点という思いが、底流にあった。その後も、文楽の人間国宝の三代目吉田篤助氏、江戸文化研究者の田中優子氏ら日本文化や着物にかかわる第一人者の名でブランド商品を手掛け、好評を博した。

麻から絹への転換、着物のオールシーズン化、後染めの導入と、十日町産地は、時代のニーズを敏感に捉えながら

「業界唯一の織りと染めの革新で勢いのある吾妻氏は注目を集めていた。その衣装や世界観を参考に、「吾妻徳穂」の名を借りて友禅の着物を作る権利をもらえないか。申し出は快諾され、80年、新ブランド「吾妻徳穂・踊りの世界」が誕生した。

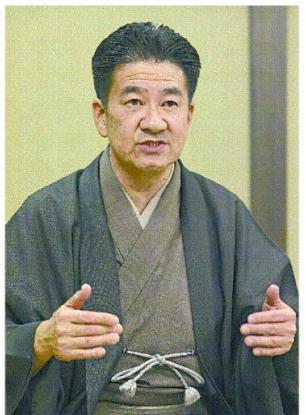
「吾妻さんの生き方や芸術観に触れることで、我々も多くのことを学んだ」と慎一氏は言う。人に学び、自身の感性を高め、それをものづくりに生かす。「人づくりこそ原点という思いが、底流にあった。その後も、文楽の人間国宝の三代目吉田篤助氏、江戸文化研究者の田中優子氏ら日本文化や着物にかかわる第一人者の名でブランド商品を手掛け、好評を博した。

麻から絹への転換、着物のオールシーズン化、後染めの導入と、十日町産地は、時代のニーズを敏感に捉えながら

「業界唯一の織りと染めの革新で勢いのある吾妻氏は注目を集めていた。その衣装や世界観を参考に、「吾妻徳穂」の名を借りて友禅の着物を作る権利をもらえないか。申し出は快諾され、80年、新ブランド「吾妻徳穂・踊りの世界」が誕生した。

「吾妻さんの生き方や芸術観に触れることで、我々も多くのことを学んだ」と慎一氏は言う。人に学び、自身の感性を高め、それをものづくりに生かす。「人づくりこそ原点という思いが、底流にあった。その後も、文楽の人間国宝の三代目吉田篤助氏、江戸文化研究者の田中優子氏ら日本文化や着物にかかわる第一人者の名でブランド商品を手掛け、好評を博した。

麻から絹への転換、着物のオールシーズン化、後染めの導入と、十日町産地は、時代のニーズを敏感に捉えながら



「産地の歴史の一端を担う使命感を持ち、ものづくりに励みたい」と語る吉澤織物の吉澤武彦社長

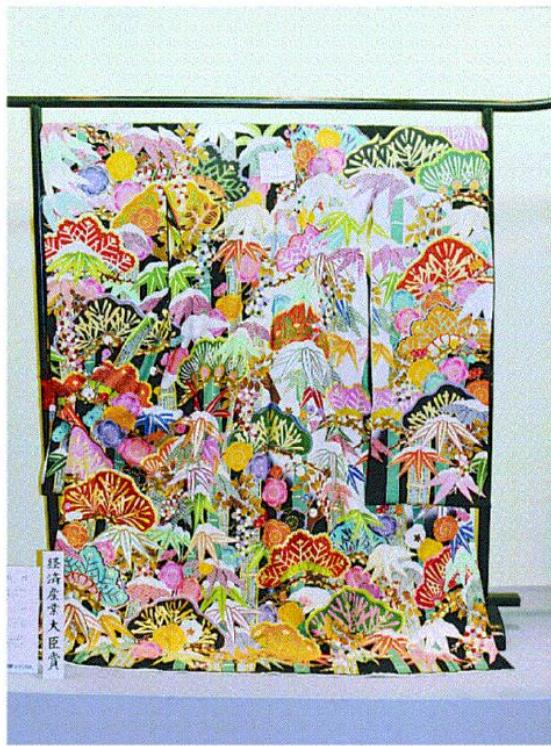
# 吉澤織物が最高賞

## 十日町きものフェスタ

十日町きものフェスタ

(十日町織物工業協同組合主催)が11月14日、十日町市本町6の道の駅クロステン十日町で開かれた。着物を扱う商社の担当者らが、十日町市内の織物メーカーが出品した紬や帯を審査。最高賞の経済産業大臣賞には吉澤織物(本町1)の振り袖が選ばれた。

きものフェスタは、1925(大正14)年に「求評会」として始まった。市内の業者が全国の小売店などに評価してもらった。商談も行う。例年は出品作を一般公開するが、新型コロナウイルスの影響で中止し



今年はおもてなしの振袖など6部門に計79点が出展された。部門賞のほか、全体から選出する特別賞もある。経産大臣賞以外の特別賞は、中小企業庁長官賞に青柳(栄町)の振り袖、経済

産業省関東経済産業局長賞に関芳(山本町5)の振り袖が選ばれた。

同組合の蕪木良一理事長(57)は「最初の求評会から間もなく百周年となる定着した行事。着物の発展のためにも続けていく」と話していた。

写真||十日町きものフェスタで最高賞に輝いた吉澤織物の振り袖「きわみ 絢爛(けんらん)」||14日、十日町市本町6